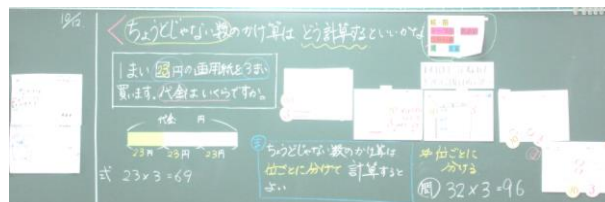


長田町小学校	学びの基盤づくり推進校
--------	-------------

1 研究の重点と具体的な取組

(1) 重点1 「考えたい」を引き出す手立ての工夫

児童が主体的に学習に取り組むことができるよう、導入における問題提示の工夫、学習計画や学習のゴールとの関連づけ、課題の言葉の厳選、児童との共有等の効果的な手立てを研究する。



研究授業板書写真

(2) 重点2 「伝え合いたい」を引き出す手立ての工夫

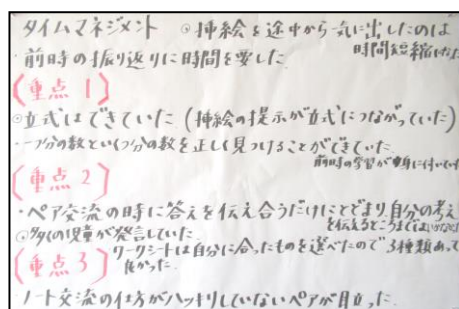
児童が、友だちと関わり合いながら学びを深めることができるよう、必要感のある交流の場の設定、伝え合う目的の共有、考えの見える化、深めの発問等の有効な手立てを明らかにする。

(3) 重点3 本時における児童の「わかった」姿の明確化

教師が学びを適切に評価し、児童に実感させるために、具体的な児童の姿、評価の仕方を明確にしたうえで授業を行う。

2 取組の検証

- (1) 教師相互による授業参観・整理会及び授業の振り返り通信による意見交流
- (2) 外部講師による指導・助言
- (3) 毎月の指導力向上の自己評価結果



授業整理会での意見交流のまとめ

3 成果と課題

(1) 重点1 「考えたい」を引き出す手立ての工夫

①成果

昨年度の実践を受け、「考えたい」を引き出す手立てとして、考えたくなるような課題を設定することを大切にしながら実践を行ってきた。既習との違いに気づかせたり、既習の振り返りを想起させるなど、児童が自ら課題意識を持つように工夫したり、使用する題材や資料の提示を吟味することで、児童の興味をひいたり、思考を揺さぶったりすることができた。

②課題

「既習との違いや課題に気づかせたい」「児童とともに課題を設定したい」という思いが強くなり、課題設定に時間を要してしまった実践が多かった。終末場面にまで十分に時間を確保するためには、導入場面における既習の振り返りの内容をより吟味していく必要があった。

児童と共に既習を活かしながら課題を設定した授業が多く見られた。しかし、児童と共有はできてはいても、より思考を促し、考えを深めることまでを意図して設定された課題が少なかった

(2) 重点2 「伝え合いたい」を引き出す手立ての工夫

①成果

児童の「伝え合いたい」を引き出すために、ワークシートや、絵カード等の活

用が多く見られた。ホワイトボードを使って、児童が考えを構築したり、色を変えたり矢印でつないだりといった表現方法を工夫したりするのに効果的であった。また、ホワイトボードを板書等に位置づけたりすることで、思考を深めていくことができた。

さらに、コロナ禍であったが感染対策を講じて、学年の実態や授業内容に合わせてペアやグループ活動を適宜行うことができた。あらかじめ教師が、意図的にペアやグループを編成しておいたことも、効果を上げた要因となった。

②課題

コロナ禍ではあったが、多くの授業において工夫してペアやグループでの交流が行われた。しかし、この交流場面で、児童は目的意識や相手意識をもって交流ができていたかという課題が見られた。教師がさせたいから交流させるのではなく、児童が交流の必要性を意識しながら伝え合うということがなかなかできていなかった。

また、たくさん見られたペア活動であったが、その多くは自分の考えに自信を持たせるための活動で、自分の考えをはっきりさせたり深めたりするための必要感のある活用が十分にできなかった。

(3) 重点3 本時における児童の「わかった」姿の明確化

①成果

教師が本時の児童の「わかった」姿を明確にして授業に臨んだため、見通しを持った指導ができた。

「わかった」姿を適切に見取るために深めの発問や問い返しを効果的に行うことで、児童の思考はより深まり、「わかった」姿へとつなげることができた。

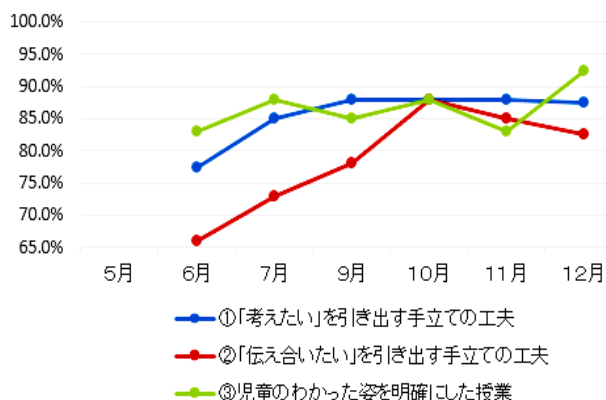
また、まとめやふり返りを通して考えの変容が見られたかを評価し、ノートにコメントを返すことで児童も自分が「わかった」ことを実感できるようにしていた授業も多く見られた。さらに、適用問題を十分に取り組めるように、単位時間内のタイムマネジメントを意識するようになったことも、成果だと言える。

②課題

重点3の“明確化”という言葉の捉え方について、本時に臨む前にどんな姿が見られたら「わかった」と考えるのかという捉えと、児童の「わかった」姿をどのような手段で見取って評価するのかという捉えがあり、共通理解が不十分であった。さらに、今年度から研究をする教科を算数から全教科に広げたことにより、これまでは本時レベルでの「わかった」を明確にして授業を行ってきたが、単元レベルでの「わかった」を明確にしておく必要性も感じた。

児童の「わかった」を見取る方法として、まとめ・ふり返りの書かせ方に課題が見られた。

学年の発達段階に応じて、児童自らが考えてまとめ・ふり返りを書けるようにするためには、板書に本時のキーワードや各教科で使わせたい用語が明確に位置づいている必要がある。構造的で児童の思考の流れに沿った板書を工夫していくとともに、学校全体で統一した指導ができるよう、共通理解をしていく必要がある。



教師による自己評価「指導力向上の自己評価表」